

那珂川市の文化財2

弥生時代の安徳台遺跡



2020

那珂川市教育委員

はじめに

那珂川市では、数多くの遺跡が存在しています。そのなかでも、^{あんとかだい}安徳台遺跡は、弥生時代中期の集落と墓域の移り変わりを遺跡の中で追うことができます。また、福岡平野における「^{なこく}奴国」に比定されている地域の拠点集落の様相を知ることができ、首長間の階層分化の実態を知る上で特に重要な遺跡であるとして、平成30年11月16日に文化審議会から歴史的価値が高いと認められ、国史跡に指定して保護をするように答申がなされました。そして平成31年2月26日に国の史跡に指定を受けました。

そこで今回は、国史跡となった安徳台遺跡の詳細について説明します。この冊子が、貴重な安徳台遺跡をより多くの人に知ってもらおうきっかけになれば幸いです。

弥生時代の安徳台遺跡

今回取り上げる安徳台遺跡は、福岡平野の^{さいおう}最奥部に位置する安徳台という台地上にあります。この台地は、^{あそさん}阿蘇山の^{かさいりゅう}火砕流で形成され、平野部との比高差が約30mで、台地上が約10万㎡あり弥生時代中期の遺跡が見つかっています。本遺跡が営まれた弥生時代（約2,500～1,700年前）は、大陸から^{いなさく}稲作が伝わり、^{のうこう}農耕を行うため人々は同じ土地に定住し、「ムラ」をつくりました。そして暮らしが豊かになると、人口が増えムラの規模は少しずつ大きくなり、次第に大型の建物も建てられるようになりました。また、ムラ同士がまとまっていき、やがて「^{かすが}クニ」（春日市の^{いとしま}奴国、糸島市の^{いとこく}伊都国など）が日本各地で成立します。一般の人々が亡くなると、^{せつかん}石棺や^{もつかん}木棺などに納められて埋葬されますが、権力を持つ首長（有力者）が亡くなると^{ふんきゅうぼ}墳丘墓が造られ、^{ひつぎ}棺に^{ふくそうひん}副葬品が多く入れられました。このような埋葬施設などは、各地域で違いがみられ、北部九州では、^{かめかんぼ}甕棺墓と呼ばれる土器を棺に利用した埋葬が弥生時代の前期から行われ、安徳台遺跡でも甕棺墓が見つかっています。

安徳台遺跡は調査によって、集落跡として130軒以上の^{じゅうきょ}住居が見つかり、その中でも2号住居は、中期中頃としては日本最大級の大きさで、^{せいどうき}青銅器の^{い が た}鋳型や^{まがたま}勾玉などが出土しています。

墓域では、甕棺墓が見つかり、その中でも2基の甕棺墓（2号甕棺、5号甕棺）からは、多くの副葬品が出土し、この地を治めた首長のお墓であることが分かりました。

それでは次に、これまでに行った調査の成果と特に遺跡の時期ごとの様子について詳しく見ていきたいと思います。

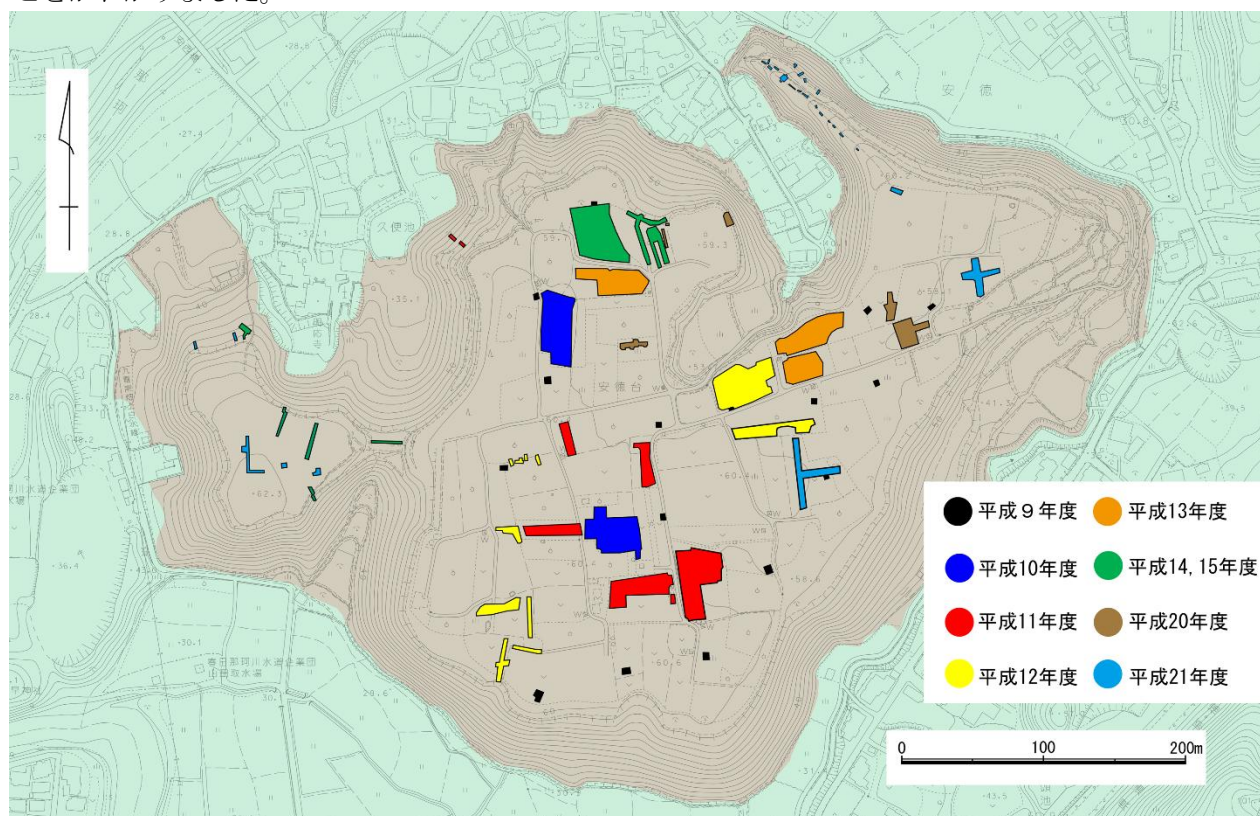


▲上空から見た安徳台遺跡 台地全体の広さは^{すその}裾野を含めて約22万5千㎡あります。

これまでの調査

安徳台遺跡では、平成9年度から平成15年度、平成20年度から平成21年度までの9ヶ年にわたる現地調査が行われています。調査面積は、約2万3千㎡で、台地上の約23%になります。ここでは、これまでの調査の中で特に重要な調査成果があった年度に注目してその内容を紹介していきます。

平成9年度の調査では、遺跡の広がりや時代を把握するため、グリッドという一边約5mの正方形に調査範囲を25か所設定して調査を行いました。その結果、弥生時代を中心とする遺跡が広がっていることがわかりました。



▲これまでの調査場所



◀平成13年度調査時 2号住居の遺跡見学会の様子

平成13年度の調査では、中期中葉の2号住居が見つかりました。平面形は円形で、大きさは直径14.6mもありました。また滑石製の鋳型などが出土しました。当時、遺跡見学会が開かれた際に、200名以上の見学者に取り囲まれても、一度にみることができた程、非常に大きな住居でした。



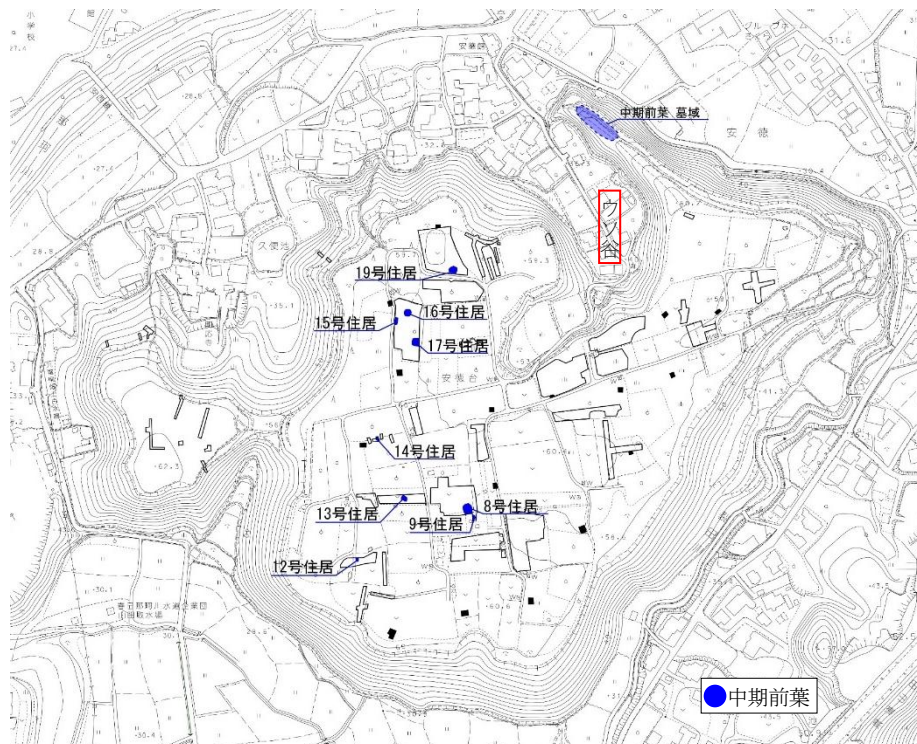
◀平成15年度調査時 右:2号甕棺 左:5号甕棺

平成14・15年度の調査では、本遺跡で初めてお墓（甕棺墓）が見つかりました。中期後葉の甕棺が大きな墓壇の中に6基埋葬されていました。その中でも一番深いところには、甕棺が2つ並んで埋葬されていました。これらの甕棺の中に、人骨や大量の貝輪など、甕棺の外には鉄剣と鉄戈が副葬されており、有力者のお墓であることがわかりました。

弥生時代中期前葉 の集落と墓域の特徴 集落

右の図からもわかるように、中期前葉^{ぜんよう}の集落は、台地の西半を中心に住居跡が見つかっています。見つかった住居跡は10軒で、平面形は円形1軒、長方形が3軒、方形5軒、不明が1軒です。

中期前葉の住居分布図▶
(図の上が北)



▲8号住居

円形で、大きさは直径約8mです。床面には、炉跡^ろと思われる焼土^{しょうど}が見つかりました。遺物は、鉢^{はち}の完形品、壺^{かめ}や甕^{かめ}の欠片が出土しました。



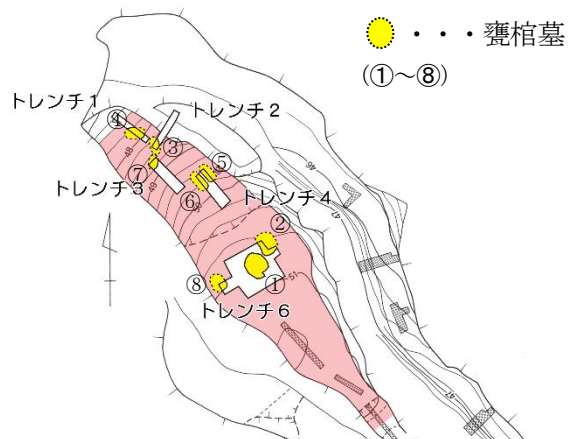
▲上空から見た15号住居

方形で、大きさは一辺約6mです。床面には、柱の跡の穴が多く見つかっています。遺物は、甕^{かめ}、壺^{かめ}、鉢^{はち}、器台^{きだい}の欠片が出土しました。

墓域

台地の北半中央にあるウソ谷と呼ばれる谷部の東側、北側へ延びる細長い尾根上の先端部で見つかりました。この尾根上は平坦で、幅約10m、長さ約40mの範囲に墓壇も含め、8基の甕棺墓を確認しました。検出した甕棺の主軸は、いずれも南北を向いていました。さらに、盛土を持つことから、墳丘墓であることがわかりました。

中期前葉のお墓の存在は想定されていましたが、発掘調査によってその存在が裏付けられたことは、重要な成果と言えます。

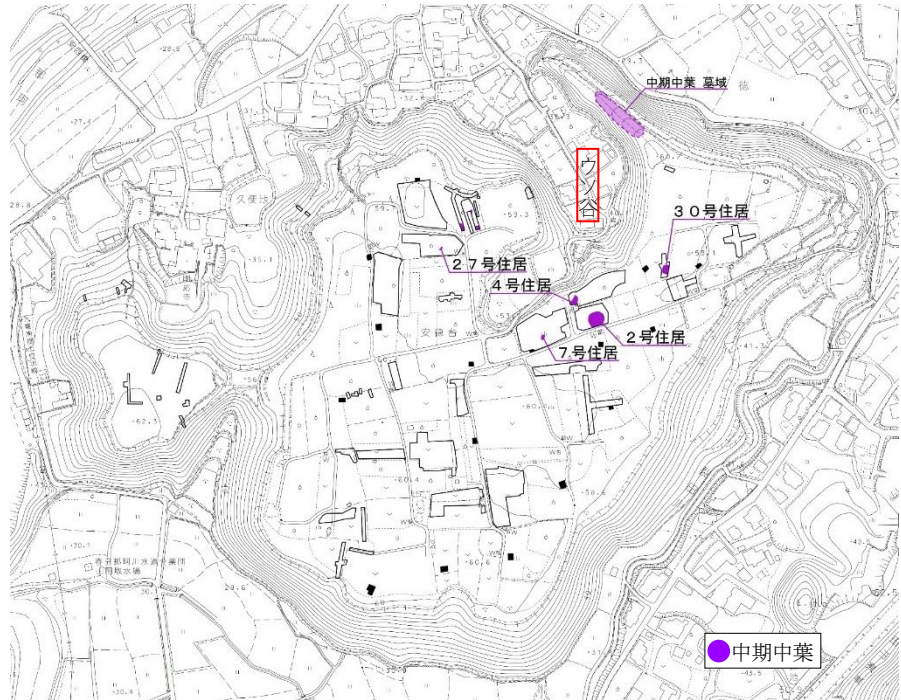


▲中期前葉の墓域

弥生時代中期中葉 の集落と墓域の特徴 集落

中期中葉の集落は、台地の西半から東半にかけて広がりをみせます。調査ではウソ谷を取り巻くように住居が見つかっています。見つかった住居は9軒で、平面形は円形2軒、長方形1軒、方形5軒、不明1軒です。

▲中期中葉の住居分布図▶
(図の上が北)



▲上空から見た2号住居

直径が14.6mもある円形の住居で、この時期では日本最大級です。また、屋根を支える柱は16本確認しています。遺物は、滑石製勾玉、細形銅剣の鋳型、舶載^{ほくさい}鑄造鉄斧^{ちゅうそうてつお}の再加工品である鉄器等が出土しました。特に舶載鑄造鉄斧の再加工品は大陸とのつながりを示すものです。

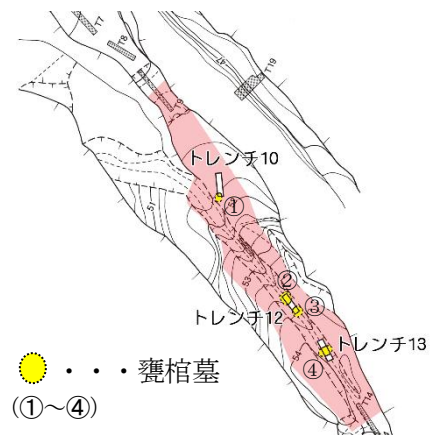


▲7号住居

長方形で、大きさは東西約3m、南北約3.3mです。床面の中央には長方形のような土坑があります。また、四隅には屋根を支える柱穴が見つかっています。遺物は、壺と甕の欠片が出土しました。

墓域

中期前葉の墓域の南側の細長い尾根上で見つかりました。尾根上は、やや平坦な地形となっており、で幅約8m、長さ約40mの範囲に墓壇、4基の甕棺墓を確認しました。甕棺の主軸は、いずれも東西を向いていました。調査の結果から、中期前葉の墓域と同じく墳丘墓と考えられます。

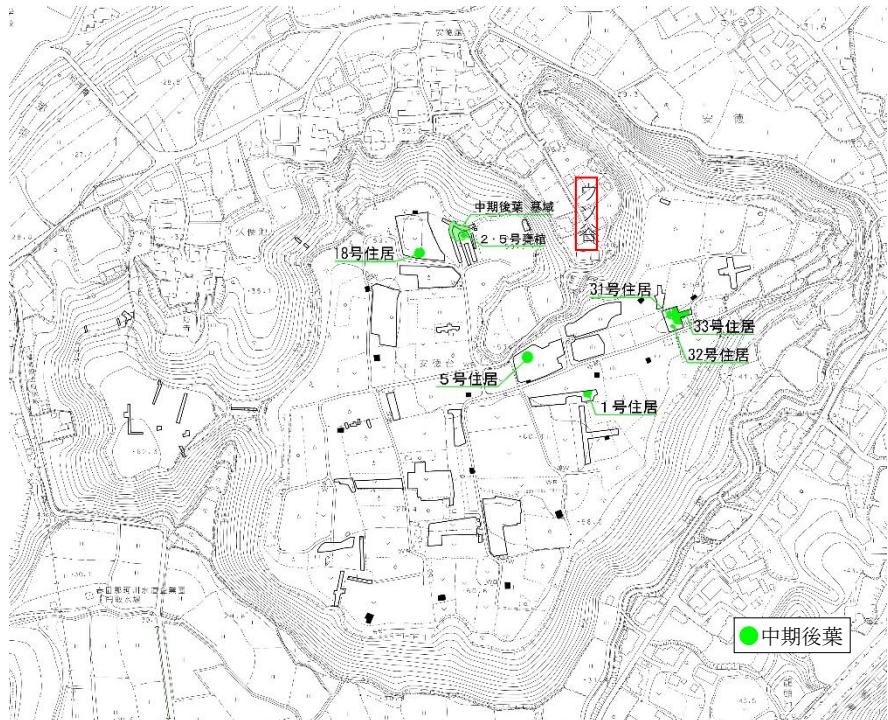


▲中期中葉の墓域

弥生時代中期後葉 の集落と墓域の特徴 集落

右の図からもわかるように、中期後葉になると集落は、台地の東半を中心として住居が見つっています。見つかった住居跡は9軒で、平面形は円形4軒、長方形1軒、方形4軒です。集落の中心が西から東へと変わっていることがわかります。

中期後葉の住居分布図▶
(図の上が北)



◀18号住居

円形で、大きさは直径約10cmです。床は2段に掘られ、それぞれ周囲に水よけや壁を保護する板を貼るための壁溝がめぐっています。遺物は、多量の土器と、銅鏃や天河石で作られた小玉といった大陸とのつながりを示す品々が出土しています。



◀銅鏃(18号住居出土)

中国で使用されていた漢式鏃の一つで、青銅製の三稜鏃です。茎は、短く変形した六角形をしています。残存長は、約2.3cmです。住居からの出土は、これが日本初でした。



◀子玉(18号住居出土)

韓国で産出されるアマゾナイト(天河石)で作られています。この時期には珍しい物です。

墓域

この時期の墓域は、ウソ谷の西側で新たに設定されます。巨大な墓壇(4m×5m)が掘られ、合計6基の甕棺墓が埋葬されていました。有力首長である2号甕棺では、被葬者の右腕に43個以上の貝輪が身に着けられていました。また、鉄剣や鉄戈、ガラス製勾玉等の装飾品といった副葬品が豊富に見つかり、2号甕棺には男性、5号甕棺には女性の人骨が、それぞれ遺存していました。



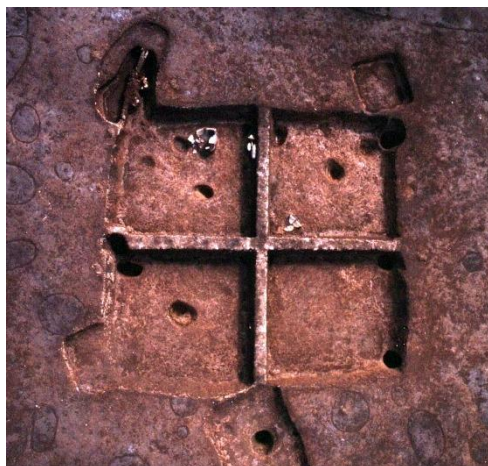
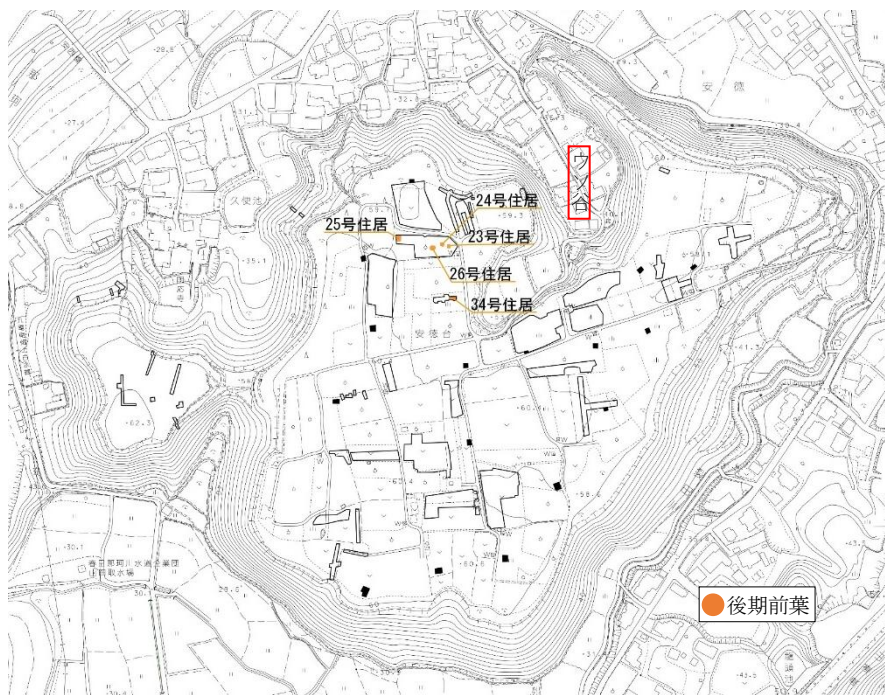
▲右:2号甕棺 左:5号甕棺

甕棺の内側は、朱で赤く塗られていました。

弥生時代後期前葉 の集落と墓域の特徴 集落

右の図からもわかるように、後期前葉になると集落はウソ谷西側に集中します。見つかった住居は5軒で、平面形は円形2軒、方形3軒です。台地上ではこの後の集落が見つかっていない為、弥生時代終末には、台地下へ移動したと考えられます。

後期前葉の住居分布図▶
(図の上が北)



▲上空から見た23号住居

一辺約3.5mの方形で、床面に柱穴が数個あります。甕や器台などが出土しました。



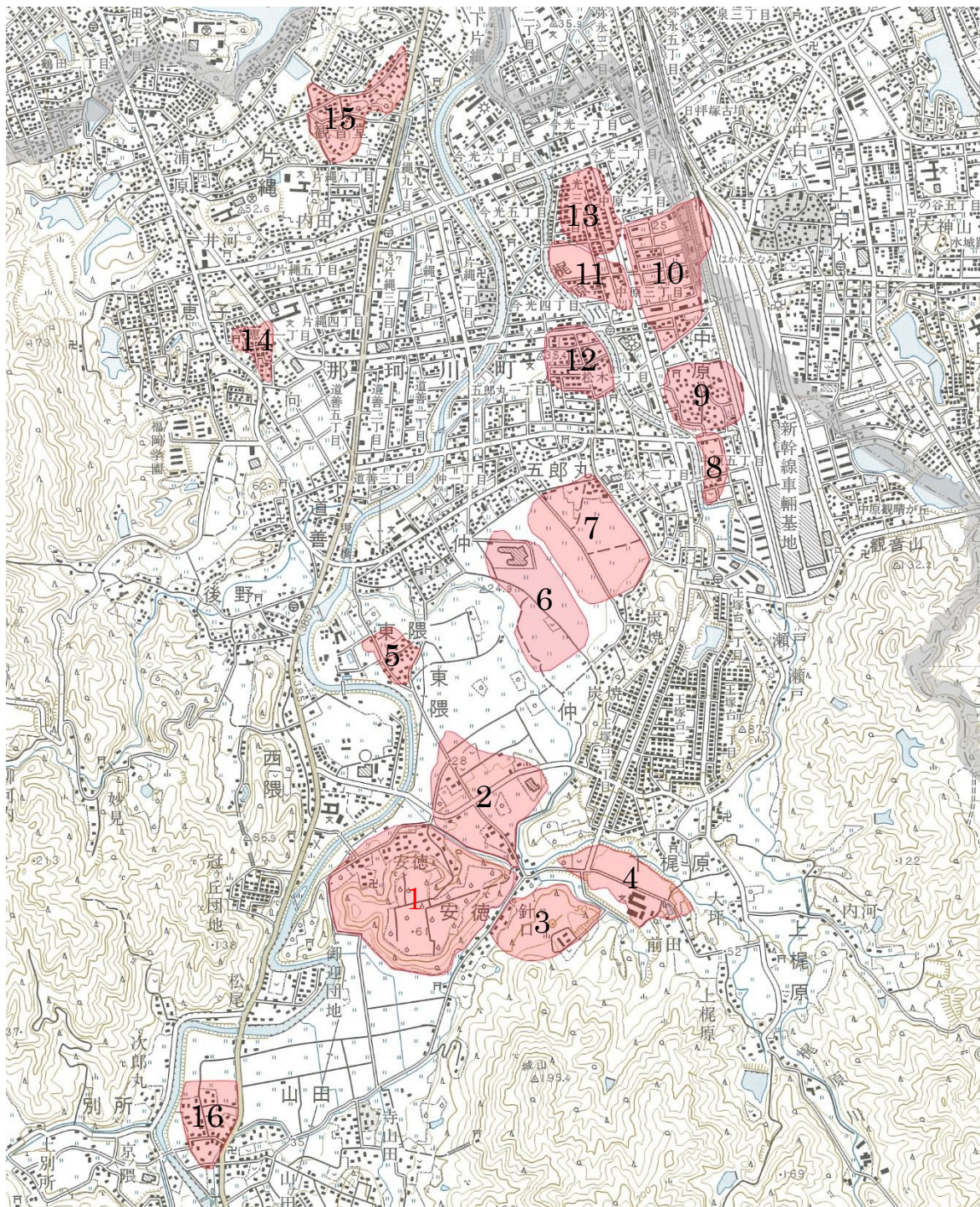
▲上空から見た25号住居

直径約7.2mの円形で、床面の外周に壁溝、中央に炉跡、柱穴があります。底に孔が開いた甕や丹塗りの壺などが出土しました。

おわりに

今回は、安徳台遺跡のこれまでの調査成果として、主に弥生時代の集落と墓域の内容について、時期を追って紹介しました。集落の特徴からは、調査で130軒以上の住居が見つかり、そのうち時期がわかる33軒について見ていくと、台地の西半から東半へ移り変わっていったことがわかります。また、大陸との交流の証となる漢式鍬なども出土しました。墓域の特徴からは、見つかった甕棺墓の特徴として、豊富なガラス製品や大変貴重な貝輪が大量に見つかるなど、被葬者が「奴国」を構成する地域の拠点集落における有力な首長であるだけでなく、特別な役割や立場であった可能性が考えられます。

このような貴重な調査成果も踏まえ、安徳台遺跡は国の史跡として指定されました。そして、これまで開発による大きな破壊を受けていないため、今なお台地上には、当時の様子を知ることができる貴重な遺跡が眠っています。このように歴史的価値の高い遺跡を大切守ることで未来へ引き継ぎ、活かしていくことは、現代を生きる私たちの大切な役割ではないでしょうか。



これまで調査された那珂川市の主な弥生時代の遺跡分布図です。

那珂川市の文化財 2
弥生時代の安徳台遺跡
2020
発行：那珂川市教育委員会
福岡県那珂川市西隈1丁目1番1号
印刷：有限会社 成光社
福岡市南区大楠1丁目29番33号

1. 国史跡^{あんとかだい}安徳台遺跡

2. 安徳原田遺跡群

3. 龍頭遺跡群

4. 平蔵遺跡群

5. 東隈遺跡群

6. 仲遺跡群

7. 前田遺跡群

8. カイ子遺跡群

9. 中原塔ノ元遺跡群

10. 中原・ヒナタ遺跡群

11. 今光・宗石遺跡群

12. 松木遺跡群

13. 今光・地余遺跡群

14. 恵子遺跡群

15. 観音堂遺跡群

16. 山田西遺跡群

※地図上の1は安徳台遺跡群の範囲を示しており、実際の指定範囲とは異なります。

この図は国土地理院刊行の地形図福岡南部・不入道を使用しました。